三重大学教育実践総合センター紀要　2004,　第24号，145－154頁

# 幼小連携接続問題の実践的研究報告その2

## －児童間交流の恒常化の取り組み－

河崎　道夫[*1]・吉田　京子[*2]・北谷　正子[*3]
藤本　　尚[*4]・権部　良子[*5]・浅田美知子[*6]

本研究会は、幼小連携問題について、①児童間交流と教員間交流、②教育課程の再編、③養成課程の改革を三つの課題として取り組んでいる。前回は全体の取り組みの計画を構造化するとともに、児童間交流の問題を中心とした実践的研究を報告した。今回は、児童間交流を進めるにあたって課題とされた「継続性」「恒常性」の実現を念頭に、①交流学年の拡大、②交流内容と方法の拡大、③年間を通して交流する計画性の実現等の実践を進めたので、その取り組みの経過と成果をまとめた。

キーワード：幼小連携、幼小接続、児童間交流、継続性

## Ⅰ．問　題

幼小連携接続の問題への取り組みは、全国的には実態調査や意識調査の段階から実際の実践的研究へと広がり、進みつつあると思われる。将来的には幼小の教育課程全体の構造を改訂していくことが望まれるにしても、それは学校制度改革の問題、及び教員の人事や養成の制度改革の問題と合わせて検討していくべき課題であろう。本研究会でもこの問題について、全体構造の柱として①児童間交流と教員間交流、②教育課程の再編、③養成課程の改革の三つの課題を検討してきた。だがさしあたって実践的に取り組むうえでは、少なくとも幼小の児童達がどのような活動を共有でき、そこでそれぞれにどのような姿を見せ、どのような成長と発達を見せるのかをリアルに捉えていくことが重要であろうと思われた。児童間交流はその意味で、現在の制度上でも従来の枠組みを少しずつ変えながら実践を進めていくことのできる領域であると思われる。前回の報告（河崎ほか2003）では、そうした研究と実践の方向性を提示しながら、特に児童間交流の実践を進め、その成果と課題を明らかにした。実践は「できるところから」ということもあってイベント中心的で継続性に欠けるものであった。しかしそれでも幼児たちにとっては成長発達への主体的な原動力となる「憧れ」が生まれ、小学生たちにおいては自己の力の確認や自己達成、向上への意欲を見せる姿等が見られた。

本報告では、こうした成果の上に立って、さらに児童間交流を年間を通して計画的に実施し、その継続化、恒常化をはかった実践をまとめながら、その意味について検討することとする。

＊1　三重大学教育学部幼児教育講座
＊2　三重大学教育学部附属幼稚園
＊3　三重大学教育学部附属幼稚園
＊4　三重大学教育学部附属小学校
＊5　三重大学教育学部附属幼稚園
＊6　三重大学教育学部附属幼稚園

## Ⅱ．実践の経過と考察

### 1．交流の継続性への最初の試み

前回報告した2002年度の実践の後半にはイベント中心の交流から恒常的交流への課題意識をもった取り組みが始められていた。ここではまず2002年度後半の取り組みについて経過と成果を報告する。

#### (1) 手作り楽器の演奏をきっかけとして

＜2月25日＞

1年A組の音楽劇を見せてもらう　これまで

の交流は、園児が「お客さん」として参加することがほとんどであり憧れの対象である小学生の姿を見る機会として実施されてきた。1A（1年A組を指す。以下同様）との交流もきっかけは手作り楽器の合奏を見るという受け身の関わりであった。そこでのビュンビュンごまの音に強くひかれた年長児が、その後、ビュンビュンごまつくりに熱中したことから、3学期には1Aが小学校の集会で発表した音楽劇「キッチンパニック」を幼稚園で披露し、その中で幼児も一緒に参加しようという機会が生まれた。当日年少、年中児達が見ている緊張感を心地よく味わっている様子の年長児の学びがあった。

**(2) 5年生総合学習ビデオ作りの取り組み**

総合学習において年長児との交流を取り込んだ授業を進めていきたいとの申し出を受け、教師間で話し合いをして、双方のねらいを大切にしながら交流を進めることとした。

5年生の授業のビデオ作成において、「誰のために作るか」「誰に見て欲しいのか」と言うねらいを話し合う中で、児童の中から年長児達が1年生の時に感じる不安を軽減することが出来るようなビデオを作れないものかとの意見が生まれたという。そのためには新1年生になる年長児の不安を具体的に知っていく必要があることに気づき、まずは仲良くなって話しを聞きやすい関係を作っていくことになったと説明を受けた。5年生の目当てとして、自分から話しかけること、名前を覚えること、楽しく遊ぶことを皆で考えたという。年長児はいろいろな人との関わりを楽しむ、異年齢の関わり、大きな人との関わりなどを経験していくことをねらいとしていた。

＜1月24日＞

遊戯室に年長児達が集まり、5年生を迎える。5年生とペアになる子、2人で誘われ3人一組になる子などがいる中で、年長児、5年生双方の友だち関係が入り交じった交流の姿が見られた。自分の幼稚園時代を思い出すようにいろいろな遊びに関わったりして、園児より5年生が楽しむ姿も見られたが、園児のいろいろな活動の姿を心配そうに眺めたり、注意を促す言葉を頻繁にかけて疲れた様子を見せている児童もいた。だが今回は、一覧表に沿って適当に声をかける子どもたちが決まり、園児達の関係が考慮されることがなかった事で園児達も緊張を高めることとなったようだ。

児童達は交流を実施するまでは園児達がすぐに壊れてしまうのではないかと心配したりする声も聞かれたようであったが、実際交流したことでその元気さやたくましさに気づかされた様子があったようだ。

反省をもとに次回までに、担当の園児を決めるとき、一人でも楽しめる子どもの存在や、ペアになることで楽しく受け止められる子どもを分けておき、児童が選びやすい名簿を準備することとした。

＜1月30日＞

昨日降った雪で園庭では雪合戦が始まったり、寒風の中、氷鬼をしたり雪だるま作りを楽しみ5年生も幼児達も冬の自然を満喫する。こうした大きい人と遊ぶ経験の少ない幼児にとっては、縦のつながりの中で遊ぶ楽しさを見つけ意欲を見せていた。

＜2月7日＞

回を重ねるごとに顔見知りが増え、5年生の来園を楽しみにして待ち、やりたいことをすぐに提案していく様子が見られた。

＜3月11日＞

5Aが待つ附小へ出かけていくと、昇降口で顔見知りの出迎えを受けた園児達。5年生は靴箱を示し手際よく上靴袋の片付けを手伝い、自分達の教室へと案内してくれる。また、玄関には5年

生だけでなく様々な学年の児童達が現れ、歓迎してくれた事も嬉しい出来事であったようだ。

5年生の給食と園児達のお弁当を一緒に食べ、おかずを少し試食させてもらう場面では、「だってお兄ちゃんの少なくなるやん！」と遠慮をしている姿を見せたり、遠慮している振りをして体よく断っている様子に、園児の多くが自分の思いを出せている事に驚いた。

### (3) 2年C組「話の世界をひろげよう」

2Cの児童たちは、生活科で目標を「人に物語や話を伝える方法にはストーリーテリングや読み聞かせ、紙芝居、朗読などがあることが分かり、自分が選んだ方法で物語や話のおもしろさを1年生や幼稚園の園児に伝える」などに置き、練習をしてきた。幼稚園でお話し会を行うことが決まってからは、子どもたちは幼稚園児が分かるようにするにはどうすればよいかを工夫することになる。幼児の様子をよく知るために、担任が幼稚園の保育を参観したり、児童と園児の遊びの交流会を行ったりした。

お話し会当日には、児童が少人数のグループに分かれ、幼稚園の全クラスのあちらこちらで幼児たちにお話しや読み聞かせを行った。

児童たちはまず、お話しをする場を作ることに関心をもち、ままごとコーナーに話をする側、聞く側とを区別して場を作ったり、保育室のコーナーを利用してカーペットを広げたりした。幼児の集中時間が短いことを考慮して、話と話の間に手遊びを入れるなど、それぞれのグループで工夫がされていた。お話し会全体を児童たちが計画し、場の設定から進行、終了までを見通したもので児童たちのひたむきさに圧倒される雰囲気があった。読み方、話し方は、とても上手なところ、声が小さくて聞き取りにくいところ、自分が読むことに熱中してしまうような稚拙なところなどいろいろな姿があったが、総じて幼児達は多少の緊張感を持ちながら一生懸命聞こうとする様子であった。児童たちにも幼児たちにとっても、貴重な経験として蓄積されたであろう。また、幼稚園側の教師として、幼稚園出身の児童たちが、自信を持って行動する姿を目の当たりにし、子どもたちの成長を感じることが出来たことも大きな喜びであった。

### (4) 考察と今後の課題

①これまでは幼稚園側からの働きかけをもとに交流がなされてきた。今回、小学校からの交流の提案で、題材が「手作り楽器」であったことが幼稚園児達にとって、関心を自分たちの活動に変えていくのに適当だった。それ以降、1年生をモデルとした目標を持った活動となっていった。

また5年生とのかかわりは就学を目の前にした年長児にとって成長を身近に感じ、入学への思いをより大きく育てることとなった。

②今回の交流で、児童たちが目的を遂行するために、幼児の姿をもっと知りたいと感じ、お話し会の前に遊ぶ機会が実現するなどのふくらみが出来たことは興味深かった。また、その後の教師間の懇談の中で、継続出来ればよかったとの反省があったが、そのあたりも幼稚園教育と学校教育との大きな相違が表れていた。学校教育では、まだまだ、授業という枠組みや単元というまとまりを壊しがたいところがあるのではないか。幼稚園との交流の機会をもっと柔軟に利用して、継続できる場として位置づけていくことが検討されてよいだろう。

③小学校側の授業の流れから、交流の時期が3学期に集中したこともあり対象となる年長児にとっては充実した保育の流れを作っていく大切な時期にどう交流を組み込んでいくかが大きな問題であった。だが、交流を重ねてきたことで、お互いの校種の子ども達にとっては地域や家庭で体験できにくくなっている人とのつながりの中で、小学生にとっては思いやりを持つことや、自分の思いを我慢すること、力加減をすること、尊敬されること等いろいろなメリットが機会を重ねるたびに経験できた。また、何よりも教師にとっても子ども達がどのような発達の姿をとげていくのか垣間見えることとなり、発達を連続して捉えるきっかけができた。そして実施ごとに教師間で打ち合わせや反省がなされたことは大

きな成果であったと思う。

## 2. クラス間年間交流の計画と実践

2002年度の実践の成果と課題をふまえ、2003年度では、まだクラス単位ではあっても、1年間を通してそれぞれの教育課程の中に児童間交流を組み込むことを試みた。幼稚園は5歳児クラスうめ組（担任は権部）とさくら組（浅田）、小学校は2年A組（藤本）で取り組んだ。以下、表1にねらいと4月から2月までの取り組みの経過をまとめて記した。

### (1) 幼稚園から見た交流実践

＜5月21日(水)　荒地の開墾＞

9：20　園庭を出発。構内道路を歩いていくと、2Aの子どもたちが柵のところまで出迎えてくれた。

トトロの森の入り口のような木々のトンネルをくぐって畑の予定地に到着した。

A子がボソッと「畑というよりも、広場ってかんじやな。」とつぶやいた。細かい草地をみて草の生えた公園を連想したのだろうと面白かった。

まず、2Aの児童と幼稚園児で畑予定地を囲むように座った。藤本Tから、子ども同士の顔合わせと一緒に畑を作ることを話してもらう。その際、2Aの子が一輪車で草を運んでくれること、トイレのことなど幼児が安心するような説明があった。

合図とともに一斉に全員が草取りをする。はじめは“草をとる”ことに全員が取り組んだ。

また、草の根がはっていて簡単には抜けないものだから、嫌になって畑予定地以外へ行って遊びだしてしまう子もいた。

2年生と幼児が交じり合って草を抜く様子も見られた。ミミズが出てくると幼児は欲しそうな様子の子もいれば、気持ち悪いと見るだけの子など様々であった。2年生は、「ミミズの糞は土の中で栄養になるんだよ。だから、土に返してあげて」と幼児に説明する場面もあり、こんなところに年齢を超えた交流のよさが現れると思った。

2年生の中には「アー疲れた。幼稚園の子がヘチマを踏みそうになったりよそへ行ったりするのを注意するのに疲れたよ。」という様子も見られ自分たちは年上なのだということがそんな会話からも感じられた。

きょうのことを草をとる前と後でどのように違ったかを話しあう機会をとった。

2年生の意見「とる前よりもとったあとのほうが、すっきりしました。」

幼稚園児の意見「草が減って土が見えてきた」と考えを出し合った。

これですぐに何かを植えることが出来るでしょうか？とたずねると、それは出来ないという。それでは、これからどうしますか？というと「落ち葉を取ります」「いや落ち葉は肥料になるから入れておく」「肥料を入れます」という。土はこのままでいいのだろうか？というと「山のようにする」「前にトウモロコシを植えたときに土を山のようにしたので今度も植えやすいようにそのような形にしたい」とそれまでの自分の経験を持ち出して意見をいう様子は、さすが小学生だと感じる。

そんなのをなんというか知っていますか？ヒントは“う”がつくよというと「植える」といい畝はなかなかでなかった。しかし、何かいいたいという気持ちはたくさんあったので、2年生全体で言わせてみると「うね」という言葉が聞こえた。そうだね、こんどはうねをつくろうね、ということで話合いは終わった。

相互にありがとうとさよならと言い合って畑をあとにした。

本日は暑かったこともあり、「のどかわいた。あとどれくらい？」と聞く声も多く聞かれ、幼

表1　「2Aと年長クラスのなかよし畑作り」実践のねらいと取り組みの経過

**幼稚園側のねらい**

- 小学生と一緒に活動することで年齢の近い手本を見ることができる
- 日常的に小学校へ出向くことで小学校の雰囲気に触れる
- 幼稚園以外の物的、人的環境に触れ、多様な経験をする
- 栽培活動の過程で身近な生物や植物に関心を持ち、異年齢の児童と経験を共有することで更に興味が広がったり深まったりする
- 植物の生長の過程で、児童と共に世話をしたり見守ったりし収穫の喜びを感じる

**小学校側のねらい**

- 自分たちが育てて食べたいものをつくるために荒れた土地を畑に変えることを考え、畑を作り、育てたものを味わうことにより、「育てて食べることができた」という自信を持つことができる。
- 幼稚園の子どもたちと畑を共有することで、協力して育てる大変さや大切さに気づき、さらにできたものを分け合い食べることで「喜ばせることができた」という満足感を味わうことができる。
- 幼稚園児と共に活動することで、自分の幼稚園時を振り返り、自分の成長に気づくことができる。

⇩　⇩

共通の活動として

一緒に作って　一緒に食べよう！…附属小学校での小学校と幼稚園合同の畑作り

幼稚園側の経過　⇩　幼小合同の経過　⇩　小学校側の経過　⇩

5/19　話し合い「幼稚園の子と畑を作ろう」

5/20　畑の場所決定　一部草抜き開始

5/21 一緒に草を抜きましょう！（幼小合同）

5/26 畝作りの話し合い

5/27 土の山（畝）を作りましょう（幼小合同）

6/3 枝豆を蒔きましょう！　さつまいものつるをさしましょう（幼小合同）

6/5 水をやろう。もう芽がでたかな？

6/中旬　水をやろう

6/25 水をやろう。

6/24 これまでのことを振り返ろう。一緒に遊んで仲良しになろう。（雨）（幼小合同）
・これまでの取り組み紙芝居を見る
・「みみずじゃんけん」ゲームで遊ぶ

7上、下旬　草抜き、水やり

9/上旬　草抜き、水やり

9/17 枝豆は大きくなったかな？

10/7 枝豆の試食をしよう！

10/23 枝豆の収穫祭の招待状を届けよう。(幼小合同)

10/24 枝豆の収穫祭をしよう！（幼小合同）
・枝豆の収穫
・一緒に遊ぼう（ダンス・「勇気１００％」）・ゲーム

10/27　文化祭の話し合い

10/31 文化祭の招待状渡し（幼小合同）

11/4 さつまいもの収穫をしよう（幼小合同）

11/7 附小文化祭に参加しよう

11/19 焼いも大会の話し合い

11/25 焼いも大会の準備をしよう（幼小合同）

11/26　穴堀り、落ち葉集め

11/28 焼いも大会をしよう（幼小合同）

2/13 きなこ作りをしよう（予定）（幼小合同）

児にとって畑を作るという先の見通しを持つことは難しいのだと思った。それに、いままで園でも作物の栽培や植え付けは経験してはいるが、荒地からの開墾のような畑作りは経験したことがなく、その日一日に見通しはおろか、これから先のことなどわからないのだから仕方の無いことかも知れない。

帰り道では、小学生が幼児の忘れた帽子を届けてくれたり、見送ってくれたりする様子が見られた。

幼児にとっては、ちょっとそこまでの小学校であるが集団で歩くとなると前の子とも距離が離れてしまって、思わず走り出したりして危ないと場面もあった。それに、構内とはいっても車が通ることもある。だからといって行き来をするのをやめてしまってはずっとできないままであると思われるので、難しいことだからこそ構内の場面で経験していくことが大切なのだと再確認したことだった。

園へもどって保育室に集まり、今日の感想を聞いてみた。

「暑くて大変だった。」「草がたくさん取れた」「おいしいものができるといい」などの声が聞かれた。よく全体で意見を聞くと「たのしかった」「よかった」というのが常であるが、ちょっとした子どものつぶやきなどを拾い上げたり、園内のどこかにいままでの活動のことと先の見通しが分かるような掲示があると、思い出したりこれからを楽しみに待ったりできるのではないか。

2Aの子どもたちはサツマイモを作りたいという気持ちが強いらしいが、幼稚園児としてはどうかと聞くと「キャベツ」「にんじん」「大根」など身近な野菜をいうことや、カレー作りと混同して「お肉を植えたらお肉がたくさんできるのかな」と期待する言葉もあり楽しい。

＜6月3日㈫　大豆の種まき＞

予定通り、9：30に小学校へ行く。構内道路といえども安全な歩きかたを指導しながら行きたいと考え、緑色の中を歩こう、間があいても走らないようにしようなどと声をかけながらいく。

目的地へ着き2Aの子二人が今回も話しをしてくれた後、藤本Tから「きょうは何を植えるか知っていますか？」と話があり、2Aはサツマイモのつるさし、幼稚園は大豆の種まきをすることを確認した。

すでに畝は整えてもらってあったので、園児一人に2粒ずつ大豆が配られ、穴に蒔いていった。その後を、2Aの子がすかさず、ペットボトルのシャワーで水をかけてくれた。その容器を幼児に見せてくれて、今度は園児も同じようなのを家から持ってくることを確認した。

その後、2Aがサツマイモのつるさしをする様子を見せてもらった。

今度、休み時間に水をやりに来ることを伝えてその場を後にした。

運動場を通りかかるとちょうど、1年生と3年生が体育の授業でリレーをしていたので運動場へと続く階段に腰をかけて見学させてもらった。そのことがきっかけとなって両方のクラスとも園へ帰ってから全員でリレーをやろうという声が子どもから聞かれた。

赤色と青色の2チームに分かれ、バトンを渡していくというだけのルールで始まったリレーであるが、子どもたちからやりたいという気持ちの高まりがあった活動なので、はりきって走る姿がみられた。

日常的に小学校へ行き、畑作りだけでなく小学校の中で繰り広げられる子どもたちの様子を目の当たりにすることで、幼児の活動内容に刺激をもらったり広がったりする可能性があるのだということを感じた。

＜10月24日㈮「枝豆パーティーをしよう」＞

附小の畑の枝豆を収穫するために9時30分

に幼稚園を出発した。

以前味見の時に教師が枝豆を根から抜こうとしてもとても固かったことを話し、きょうは、2年生の子に抜いてもらおうということになった。2年生は思ったよりも力持ちで次々と根から枝豆を抜いていった。教師の手で小枝に切り分け、子ども達の手で幼稚園まで運んだ。

遊戯室に入り、各クラス6グループに小学生3〜4人が加わって新たなグループを構成し、枝からさやをはずした。枝豆をゆでている間に、「勇気100パーセント」のダンスの見本を見せてもらうことになった。2Aのダンスは、決まるところがピシッとしていて、その表情がとても晴れやかであった。見せる人がいるという張り合いが感じられた。知っている子がみてくれているということが子どもをやる気にさせるという効果を多大に持つということを実感した。

つぎは、幼稚園も一緒に踊った。子どもから伝わっていた踊り方は、細かい箇所がところどころ違って覚えていたが、そのことはむしろ当然でそれよりも、一緒の空間で違う年齢の子ども達が同じ音楽にのって一緒の時を共有できた喜びを経験できたことが大きな要素であると思った。共通の音楽なり、体の動きなりを持つということは交流にとって有益なことである。

お返しに幼稚園からは、「ディズニー体操」を見せることになった。幼稚園の子ども達の間でもざわめく「ドナルドのおしりフリフリ」の箇所は、2年生にとっても、とても恥ずかしいらしく「あんなこととてもできないな」という表情と同時にざわめきや歓声があがった。心理的にいってもこの2年間の開きは恥ずかしさという点において大きく違うところだろう。

久しぶりにみみずジャンケンもした。

各クラスに分かれ、グループごとにテーブルについて枝豆を分けた。一つずつ各自の皿に分配しているところや一掴みずつ分けているところ、また、一さや手にとってはまず食べて皿はゴミいれになっているグループなど分け方は様々だった。小学校の授業の関係で、この「分ける」という経験に小学生の知恵を発揮する時間が十分には無かったことが少し残念ではあったが、きょうの活動の中心は、グループごとの子ども達がおいしく食べるということにあったので、これでよかったのではないか。

今回は、これまでの交流（クラス全体対クラス全体）より1歩進んで、グループ単位での個人の顔が見える交流の初回となった。これからこのような、個人対個人という交流がどのような成果を見せるかを見ていきたい。

＜11月28日㈮　焼きいも大会＞

9：30〜10:30　　13：00〜13：45

前日に調べた天気予報では、午前中から70％の確率で雨模様だった。それで幼稚園の担任達は、28日にいもを焼くことは出来ないだろうと考え、来週の計画を考えていた。ところが、当日の朝を迎えると晴れていて、太陽の光も差していた。

9：30ころから、手袋とスーパーの袋、そしてアルミホイルに包んだサツマイモを持って小学校へ向かった。

前日に2年生の人達の力で、畑に穴を掘り落ち葉を入れてもらってあった。そこにもみ殻を入れ幼稚園の子ども達が持っていった“おいも”をのせた。“おいも”を覆い隠すくらい落ち葉を集めなくてはならなかった。そこで、ここのところ一緒に活動してきた、幼児と小学生のグループ単位で小学校の敷地内に出かけていって、スーパーの袋一杯、落ち葉を集めた。一旦幼稚園に戻って、お弁当の後、1時ころにもう一度出かけていて、焼いもをいただいた。とてもおいしかったという子ども達の感想だった。

「2ねんせいのこと、ともだちになって（こんなにおいしいやきいものつくりかたをおしえ

てもらえて）よかったよ。」ということだった。

### (2) 小学校から見た交流実践

＜5月26日(月)　畝作りについて話し合う＞

荒れ地を開墾した後に子どもたちが、「畝作りをしないといけない。」と言ってきたので、話し合いを持った。まず、畝作りのために自分たちでする仕事を決めた。そして、一緒に作業をするときに幼稚園の子に注意してほしいことを考え、話す役の人を決めた。

注意してほしいことは、次の通りである。

- ミミズを殺さない。
- 4年生のヘチマの畑までいかない。
- スコップを落とさない。
- 遊んでいいたら「おいしいのが、できないよ。」と言う。
- できあがった畝をふまない。

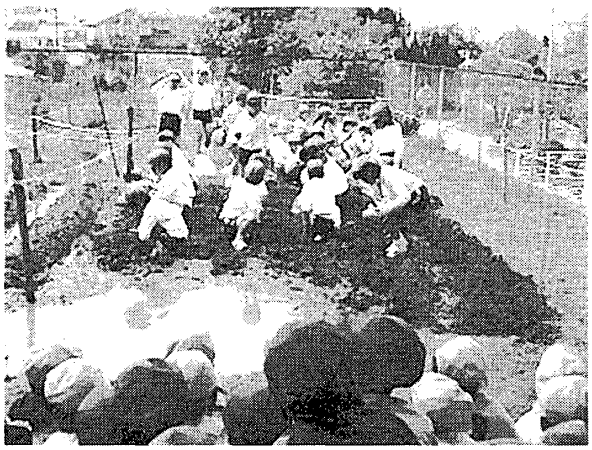
話し合いの後、予め、2Aの子どもたちで一部の畝を作って、とうもろこしやひまわりの種をまいておいた。幼稚園児に、畝を分かりやすく説明するために畝を作っておいた方がよいと、子どもたちが言ってきたからである。

翌日、合同で、畝作りをした。小学校が注意事項を話した後、移植ごてを持った2Aの子どもたちが畝の作り方（土の掘り方と積み上げ方）を見せてから、一緒に畝を作った。

小学生が作った畝にさつまいもを植える予定であることを幼稚園児に話した。そこで、幼稚園児に何がつくりたいか聞いてみると、「いも」や「枝豆」をはじめ、「たこやき」、「魚」と言ってきたので、2Aの子どもたちは驚いたり、苦笑したりした。

＜10月下旬～11月中旬　焼き芋大会の準備＞

合同で作った畑で小学生は、今年の天候と世話をしなかったことで、47個の小さなさつまいもしかとれなかった。ここで「焼き芋大会」をどうするか、という問題が出てきた。話し合うと、このままではできないことがわかっているので、このさつまいもを使って何かを作ろうかという考えまではでた。しかし、具体的に何



を作るかは決まらなかった。

すると、幼稚園からさつまいもを掘りに来てほしいという依頼があった。2Aの子どもたちの弟や妹から、「どうも小学校の畑のさつまいもは、あまりとれなかったらしい。焼き芋できるかな。」という話が幼稚園で出てきたというのである。2Aの子どもたちに「幼稚園から『幼稚園にある畑のさつまいも堀りを手伝ってほしい。』と言われているがどうするか。」と聞くと、子どもたちは「手伝いにいきたい。」と言うので、手伝いに行くことになった。

幼稚園の子が掘ったあとに残っているいもを掘り起こす役をもらった。10月に芋掘りをしているので、どのあたりを掘ればいもがでてくるのか予想がついたので、たくさん掘ることができた。そして、幼稚園からお礼にさつまいもをもらった。焼き芋大会をするために必要な100個のさつまいもが手に入った子どもたちは、早速、焼き芋大会の方法や準備の説明を考えて、幼稚園に焼き芋の準備を教えにいった。

枝豆パーティーのときにできたグループに分かれ、まずさつまいもを濡れた新聞紙で巻き、次にそれをアルミホイルで包むように説明したり見本を見せたりして、幼稚園児とともに作業をした。

焼き芋大会の前日、2Aの子どもたちで、芋が焼けるように、畑にしていた所に6平方メートル、深さ40cmぐらいの穴を掘った。その中に乾いた落ち葉を入れ、翌日の焼き芋大会に備えた。

### (3) 恒常的な児童間交流の成果

①幼児にとって

- 小学生の活動的な様子に“自分たちもきっと小学生になったら同じようにできるんだ”といったあこがれの気持ち、先生に注意された時の小学生の表情と言葉から感じたがんばりなど、実際に小学生と活動する中で子ども達が見たり感じたり行動したりした体験は、具体的なあこがれの気持ちにつながっていった。
- 小学校には知っている人がいる、自分たちは小学校へ行ってそのお兄さん、お姉さんと一緒に活動したことがある、といった人的なつながりの深まりからの安心感は、小学校生活における、45分の授業、教師の対応、さまざまなきまりなどといったシステム的な不安を自ら乗り越えていくひとつの力になるのであろう。

②小学生にとって

幼小連携の学習のよさは、大きく言うと、児童の自尊感情の醸成ができる、ということである。そのよさをさらに見ていくと、次の4つがある。

- 1つは、小学生が幼稚園児の仕草や活動の様子を見て、自分が幼稚園児だった頃のことを思い浮かべ、今の自分との違いを振り返り、小学生である自分の成長を確かめることができるよさである。「わたしも、ようち園に行っていたときは、こんなに小さかったのかあとおもいました。」(2年生)という子どもの日記にあるような感情が、小学生の中に生まれてくるのである。
- 2つは、自分が幼稚園児の役に立っているという、自己有用感を味わえるよさである。一緒に遊ぶときのルールを説明したり、草抜きの仕方を教えたり、枝豆の数を数えて人数分に分けたりして、どの子も活躍できる場面が必ず生まれるからである。特に、幼稚園児があこがれの目でもって接してくるので、小学生には否応なしに張り切る姿が見られる。
- 3つは、活動するたびに起こってくる問題を解決していかなければならない状況が生まれ、それを解決しようとする力がついてくるよさである。小学生なりに「しっかりしなければいけない。」という責任感に近い気持ちが生まれるが、幼児の行動の意外性にひっくり返されることが多いからである。
- 4つは、児童に対する指導者の子ども理解が広がり、多面的な捉えの下、それぞれの児童への指導が変わってくるよさである。幼稚園の子どもと活動を共にすると、その子が本来持っている姿がよく現れる。例えば、自分勝手でよく手が出ると見ていた子が、幼稚園児の目線になるようにしゃがんで話を聞き活動を進めている場面に出会うのである。その子のよさを学級に広め、気づいていなかった友だちの姿に触れさせることができるのである。

## Ⅲ. 今後の課題

この2003年度実践はまだ終了していない。それも含めて別の機会に今後の課題を詳細に提起する。全体としてはこうした児童間交流をふまえ、幼小の教育課程を突き合わせながらその関連を図っていくという大きな課題があるといえよう。

## 文　献

河崎道夫・朝田かおり・北谷正子・杉澤久美子・西原信孝・藤本尚・松本敬子・山崎征子・山田康彦・吉田京子　幼小連携接続問題の実践的研究報告　－児童間交流・教師間交流の取り組みを中心に－　三重大学教育学部教育実践総合センター紀要　23号　P.55－62